

北朝鮮の食糧、食生活事情について

宮 塚 利 雄・宮 塚 寿 美 子

はじめに

本稿は韓国の平和問題研究所が発行している『統一韓国』（2014年6月号、7月号）に掲載された、北朝鮮の「食糧事情」や「食生活」に関する記事の翻訳と解説である¹⁾。北朝鮮の食糧事情の実態については、WFPやIMF、韓国の農村経済研究院などの機関が毎年、北朝鮮の穀物類の生産高などの数字を公表しているが、これらの数字だけを持って、「今年は豊作だから深刻な食糧不足問題は発生しないだろう」とか、「外国からの商業ベースでの食糧輸入量や、友好国などからの食糧支援量がどれくらいであれば、今年も深刻な食糧不足に陥ることはない」などと言った分析だけでは、北朝鮮の食糧事情を理解することはできない。先にあげた研究機関が発表した生産統計は、現地での完全な調査に基づいて出された数字ではない。したがってこのような調査機関の発表する数字はあくまでも参考資料と理解すべきであり、これらの数字をもとに北朝鮮の人民の現実の食糧事情は理解できないと考える。

今年も例年の如く、「春先からの干ばつで農作業に多大な支障がきたしている（それも今年は史上最大級の干ばつとのこと）」、そしてようやく田植えを終えたと思ったら、今度は台風が来て北朝鮮にも大きな被害をもたらした。つまり、「干ばつ」の次は例年通り「クムルピへ（大雨・豪雨被害）」で田畑の土砂が流出し、農作物の生産に多大な被害を与えたということである。北朝鮮の農業生産において、特に稲作

においては害虫被害も無視できない。最近では少なくなったとはいえ「イネミズゾウムシ」などの病虫害（この病虫害は日本から北朝鮮に伝播したもので、日本にはアメリカのミシシッピ州から伝播したものである）や稲もち病などの被害などがあり、それに東海岸の稲作地帯で見られる日本では「やませ」と呼ばれている寒風が吹きあれ、稲作の成長に大きな被害を与えている。そして極めつけは、収穫期における台風被害が加わり、結局は「今年も自然災害の影響で（決して人的被害、主体農法の誤りであるとは言わない）米・トウモロコシ・麦の生産量はいくらで、どれだけの食糧が不足する」と言うような発表になるのである。北朝鮮の農業事情に多少なりとも精通している者なら、問題は収穫された穀物類の貯蔵設備が貧弱で、「貯蔵倉庫」としては欠陥だらけであるということである。「コクゾウムシ」などによる食害や雨もれなどによる腐食、さらには頻発する軍人などによる食糧庫からの穀物の強奪などによって収穫量から、1~2割の穀物類が最終的な消費者に届かず消滅するのである。

おなじような事例は電力不足に悩まされている「北朝鮮の電力事情」にも言える。日本の植民地時代に建設された水豊ダムなどの水力発電所などで生産された電力量が、最終需要地の工場や家庭に届くまでに、幾つかの変電所や送電所などの送電設備や送電線の老朽化・腐食などによって、これまた全発電量の2割前後が消滅してしまう事例と類似している。

「機械化されていない時代の農作業の辛さ」

を体験している筆者（宮塚利雄。以下断わらない限り筆者とは宮塚利雄のことである）にとって、北朝鮮の食糧生産と食生活事情は他人事ではない。北朝鮮人民の垂涎的である「人造肉」を筆者は日本のテレビ番組で紹介し、ゲストから「こんなまずいものをよく食うな」と言わしめたことを、悔やみ、深く反省している。北朝鮮の人間が「白米はともかく、せめてトウモロコシ米だけでも1日に三食とは言わないが、朝夕二食だけは食べたいものだ」と言った脱北者の切実な発言を思い出した。また、北朝鮮内でも特に食糧事情が悪い慈江道を紹介したテレビ番組で、「泥炭と草根木皮を混ぜただけの食事」の場面が出てきたことを鮮明に覚えているが、暗い部屋で粗末な食器に痩せこけた軀の老婆の姿が映し出され、驚愕したこともあった。

第1章 「トウモロコシを入れるリュックを持ってくるべきだったか」 (6月号 40~41 ページ)

金おばさんが教えてくれた話である。その日は本当に“ついていなく”、後悔することこの上ない日だったという。何たって、一日中足の裏がすり減るくらいに歩いても、穀物の1升も得ることができず、結局は夜が暗くなりかけた頃になってようやく家にたどり着いた。金おばさんが住んでいた咸鏡北道・清津は100万人を超える人が住む大都市である。人が多いせいか、この頃はまったく一食分の食事の準備もまともにできなくなったという。その日の朝に埠頭に出かけて、商売用に貯めたお金で15匹のイカを買った。それを持って人々が大勢いる市内を抜けて海辺がない古茂山の田舎の農村まで入って行ったが、これはどうしたということか。路地裏でそれこそ怪物のような数人の軍人に、皆取られてしまったのである。

朝家をでる時に、夫がしつこく念を押したの

は「絶対に人気のない路地裏には入ってはいけない」と言ったが、どうして新作路（新しく出来た大通り）で、魚と米を替えれるとでも言うのか。そこで気を利かしてあたりをキョロキョロ見渡ししながら、金のありそうな家为目标に入ってしまったら、とんでもない馬賊のような奴らに会ってしまったというのである。そこで、こいつらの世界はどうやって食べるのか知らないが、軍服を着たこのような奴らに物を盗まれ申告でもしようとするならば“何だって、軍人に対して国を良く守ってくださいって、と言ってありがたいと思うのが普通じゃないのか？”と言われるのがオチだ。「何を言っているんだ、ものは正しく言わなきゃ。国というのは民がいての国だろう。だから民を守ってこそそれが軍隊と言うものであろう。民から奪って食べて何が軍隊か」と言うことだ。どこかへ行ってこの悔しさを晴らしたいのだがそんな所もなく、独り空を恨めしそう見ながら手ぶらでとほとほと、再び20キロメートルくらいを歩いて市内に入ったが、家が近づくにつれて足は千斤万斤のごとく重くなった。ああ、これはどうしたらいいというのか。一日中待っている夫や子供たちに、どうして手ぶらの姿をそのまま見せることができるというのか。うろうろまごついているうちに、市場に行った永喆お母さんことを思い出し「米一升でも分けてもらおう」とその家に向かった。もともとやり手で社交性のある永喆のお母さんだったから、一日三食のご飯を絶やすこともない家だった。

こっそり歩み寄って行き、門の取っ手を取って開けたところ、永喆のお母さんがどうしたとか初めて見る男と、部屋でいちゃついており、よく見るとその男と裸でうれしそうに抱き合っている姿が飛び込んできた。一体どうしたということか。ドキドキしながらその家の門をあわてて飛び出してきたが、いくらなんでもそうだろうが、今が盛りの花のような少女でもない

40もとうに過ぎた女が何という醜態だろう。同じ年頃の女だけに顔がさらに熱くなった。なんだかんだで家には入れず、あちこちうろついているうちに気を取り戻すと、いつの間にか部落を飛び出して鉄道の駅が見えるところまで来ていた。突然、知らない男が前に立ちふさがった。男の背中には軍隊のリュック（背囊）を背負っていたが、よく見るとなかなかの美男子である。“何をしますか”と言うと、じろじろと私の顔を見て、その男が手をわしづかみにして、自分とどこかに行こうと誘うではないか。真夜中にお化けでも出たのかと、金おばさんは驚きあわてて手を振りほどいた。鉄道駅の付近にはもともとこのようなチョンガー（独身男性）が多くいて、日が暮れて暗くなりかけるころになると、当てもなくうろついていた男どもが今宵の恋愛相手を探して歩き回っていることは知らないわけではなかったが、自分が直接その場に出くわしてみると、驚かざるを得なかった。怒りに満ちた屈辱感に“私はそんな女ではないわよ!”と、叫びながらその場を離れた。するとどうしたことか、“そのような女には見えないから、さらに気に入ったんだよ”と男が付いてきた。手を取ってさっと抱きしめた男の背にリュックが見えた。自分の話を聞いてくれるならば、リュックの中にあるトウモロコシを全部あげるといっているのである。20キログラムはあったらどうか、少ない量ではなかった。しかし、おばさんは男の手を振りほどいて、さめざめと泣きながら歩いて家に帰ってきたが、来ながら思いっきり悪口を吐いた。“世の中も本当に汚い世になっていくものだ。私の値がトウモロコシの一袋分にしかならないとでもいうのか?”。

あらゆる怒りが燃えたぎり、息せき切って家に帰って来て出入りの門を開けると、二人の子供が一斉に寄ってきて“お母ちゃん、ご飯頂戴”とねだり、そうしながら母親の背中を探した。何も持っていないことに気付いた末っ子はめそ

めそしていたがついには“ファン”と大声を出して泣き始めた。おばさんはペタッと地べたに座り込んで、幼い子供達にまた食べさせてやることのできないことに気づき、茫然自失となった。そこに夫は配給も出ない職場から今しがた帰って来たばかりで、何が何だかわからず血走った目で眺めている。お腹がすいたともいえず貧血でも起こしたような目である。その瞬間、どうしたことか少し前まではついていないと避けてきた、あのリュック一杯にトウモロコシの入った姿が目の前に影のように現れた。“何が何でもそのトウモロコシ袋を持ってくるべきでしたね。そうすれば飢えた家族にトウモロコシ米でも腹いっぱい食べさせてやることのできたのにね”と言う後悔が付きまとった。

今年3月にハナ園²⁾から出てきた金おばさんは、このような話を延々としながらハハハと笑い、これからは家族が皆、豊饒の地に定着したので、これからはこのような屈辱を味わわなくても良くなったと、笑みを浮かべていた。

解説

この翻訳文を見ながら北朝鮮のマスコミが報じた「異常に腹が出た金正恩が、夫人の手をつなぎながら遊園地で子供達と戯れている」映像を思い出した。平壤に住む子供と地方に住む子供では社会的に与えられる“恩恵”には天と地の差があるといっても良い。日本のマスコミが報じる平壤市内にある遊園地や動物園で無邪気にはしゃいでいる子供たちの姿は、平壤以外の都市や村々ではほとんど見られない。平壤は北朝鮮のショウウインドー都市であるから、外国人の目に「幸せな子供たち」を演出しているのである。

港で仕入れた魚は北朝鮮では動物性蛋白質摂取の目玉である。したがってこれまでは嫌われていた職業である漁夫は、今では北朝鮮の「三

大富者（サムデプジャ）、すなわち幹部、寡婦、漁夫はどれもカンブ・カブ・オブと読む」の一つであり、魚は高値で売れ、都市の市場よりも山間奥地などの農村では米と何倍もの価格で取引される³⁾。研究室には穀物を入れて運ぶための「ベナン（背囊）」が二つある。頑丈にできており、紐がやたらと多い。これは泥棒除けでもあり、背囊はほとんどが緑色か黒色、灰色などの単色であるが、中には刺繍などを施したものもある。平壤市内などでは、この数年前にこの「穀物などの食糧用の重いものを運ぶ生活必需品としての背囊」は姿を消したというが、それは外国人の目に悲惨な食糧事情をそのまま表わしているようなものと言うことで、このような「食糧袋（乞食袋とか物乞い袋ともいう）」は平壤市内からは姿を消しているようだ。代わりに最近ではデズニーのキャラクターが描かれた背囊がほとんどであるが、中身は以前と同じ食物が入っているようだ。

北朝鮮の鉄道駅の近くには売春宿が多く、「花売り娘」に扮して男性客を呼び込むのである。このような女性を相手にする客達が利用する宿を「待合室（テハプシル）」などと呼んでいるが、地域によって花代や呼び方も異なるのかもしれない。配給も出ない工場から帰ってきた夫は、夏炬冬扇のごとき存在で、最近では「夫としての役を果たさない、大黒柱として一家の生計を立てることができない、つまりは金を持って来ない、居ても居なくても同じような存在」なので、「昼行燈」と蔑まれているようだ。夫は「世帯主（セデジュ）」と呼ばれ、「生活費（センファルビ）」と呼ばれる給料を持って来てこそ、初めて世帯主としての存在感があるのだが、最近では海外での外貨獲得のために、それこそ「奴隷労働」に等しい過酷な条件のもとで働いて、それを家族のもとに送金する世帯主も多い⁴⁾。

第2章 「誰がもっと食べなければならないのか？」（7月号 42～43ページ）

中朝国境の恵山市場の入り口で二人の男女が争い始めた。怒鳴り合う声が高まり、相手を罵る言葉が出始めると、商売人たちがわいわいがやがやと集まりはじめ、人だかりの山となった。骨太の男は朝鮮牛のように目をカッと光らせて、今にも飛び掛からんばかりに喚き声をあげた。女も首に筋を立てて今にも何かが始まりそうな気配である。争いが始まったのは二人が共に市場で麺類を買ってきて、それを分けて持つて行くことから始まった。麺類10束（一束は1kg）を同じように5束ずつに女が分けたが、そこで頭に来た男が喧嘩を売ったのである。“いくらそうでも一日中車（リヤカー）を引っ張ったのは俺なんだ、一束くらい俺がもっと持つて行っても当たり前じゃないか。俺が一つの荷物を抱えた客をひっぱて来たこと以外に何があるんだというんだ？”。“この場になってモスム（他人の家に住み込んで働く労働者）の存在で、主人にぞんざいな口のきき方をすると何事だ。やあ、この野郎、初めに契約する時に半分ずつ、と約束したではないか？”。

話を聞いているとどうやら女がリヤカーの持ち主で、男は女が雇用した人に間違いない。駅前や市場ではリヤカーで客の荷物を載せてやり、金を受け取っておいて半々に分けることはよくあることだ。朝方に仕事を始める時はそのようにしようとしたが、約束通りに一日中汗を流しながら力を使ってみると、どこか間違っているような気がした男が、怒り出したようだ。だからと言ってすでに決まったことをリヤカーの主人である女が覆すことはありえないことである。喧嘩もそろそろ限界に来た。“やあ、たかがリヤカー一台を持って、何が主人だと？ 全くふざけている。つべこべ言わず麺類をもう一

束出せ。そうしないとお前をこうなったらぶん殴ってやるだけだ、分かったか”。男の口答えにばかばかしいとでも言わんばかりに薄笑いを浮かべた女が再び叫んだ。“やあ、この野郎、お前が私の車のお陰で力を少し使って麺類を得ただからありがたいと思え、私がいなかったらお前まであの麺類はもとより、一日中空かした腹を抱えて空を見ていただろう！、分かったか。早く行けこの野郎。もうお前のような奴は見たくもないから”。

どうしても女の氣勢が弱まるすきを見せないと分かるや、男が見物人たちに、支援を頼んだ。“皆さん方、考えてみてください。この女は車の主人だと言って客を呼び、自分は牛のように荷物を引いて、それでいて得たものは“5対5で分けよう”。私の家の家族は5人だよ。明日の昼ごはんまで食べようとする、これでは足りない。ああ、それはそうと酒の一杯でも飲まなきゃ。そうすれば明日も力を出せるから。この寡婦女の心は上手いこと言って、明日も俺を呼んで食べたければ麺類の一束くらい譲歩してお酒の一本もごちそうしてくれれば、最高だろうに。そうじゃないか？。どうか審判してください”。すると、見物人たちは俺が俺がと一言ずつ話した。“アイゴ、なんていうことだ。朝仕事を始める時にそのように約束したのなら、それを守らなきゃ”。これは間違いなく女側の意見だ。“えい、それはそうだけど、一日中こき使ったなら酒の一本くらいは買ってやらなきゃ。麺類10束分を儲けようとするなら、相当量の荷物を運ばなきゃならないだろう”。“そうだと”。寡婦の暮らしなら米が三枡と言う言葉を知っているか。そんなに男をこき使うのか。その人は使われるだけの力を持っているようだ。喧嘩などしないで麺類一束をもっとあげたら”と言うのは男性側を擁護する声だ。突然、リヤカーを引いていた男がいい頃合いを見つけて、前に出てきた。“寡婦同務、よく聞い

たでしょ？酒を飲みたいからそちらの分け前から、麺類一束をこちらに出来ないかね”。“全くあきれた。もっともっとと、うるさいね。ふん！”。寡婦はそう言い残して自分の持ち物であるリヤカーを引っ張ってさっさと行ってしまった。“全く人情味がないと言ったら、今に見てろよ”男やもめが女の後ろに付いて悪たれをついた。もう会うことがない女のように。

翌朝、“寡婦同務”は市場に出かけようと家の出入り門を開いた。リヤカーだけあれば半々の分け前で呼べる運び屋はいくらでも探すことはできた。ところがこれはどうしたことか。昨日、リヤカーを引っ張る運び屋として呼んだ男が、庭に中腰で立っていた。“どうして来たの？私をあのような目に合わせておきながら”。“はい、俺、昨日はすみませんでした。今日も麺類5束を儲けることができるように、俺を使ってくださいよ”。“だめよ、できないと言ったでしょう”。“俺、もうあんなことはしないから、絶対に約束するから”。男がひざまずいた。“それでは今日は馬鹿なことを言わないで半々にしましょう”。“はい、そうしましょう”。

この頃よく目にする北朝鮮地方の風景だという。ベアリングが装着されたリヤカー一台だけでも持っていれば、それなりにトウモロコシで作った麺ならば、一日三食は飢えることなく食べることができる。いつのことだったか私が韓国の老人に会って北朝鮮の話をするのがあったが、その方がこのような話をした。“我々もリヤカー一台があれば食べて生きていけたそのような時代があったよ。それは60年代の頃だったかもしれないね”。今、北朝鮮はこの老人が話した大韓民国のその時がそうでないかと思った。

解説

筆者が韓国の大学院に留学した41年前のソウルの裏通りはリヤカーと自転車の天国であった。その中でも自転車に金網の籠を載せて“ケーパラヨ（犬を売って）”と“トンチヨウ（汚い屋さんの掛け声）”だけは今でも生々しく耳にこびりついている。韓国で生活を始めた時、日本語が生活用語として残っており、それは釜山に行ったときに魚に関する用語に多かったことを覚えている。中でも“リヤカー”や“バケツ”はよく聞いたし、“ふかし”“いっぱい、いっぱい”も良く聞いたが、車の知識がない筆者はこれが何の意味であるか分からなかった。さて、ここで紹介されているリヤカーは、日本で見かけるリヤカーなのか、それとも“タルタル”と呼ばれる鉄の輪のついたリヤカーをかなり小型にした運搬道具なのか。筆者はこのタルタルを中朝国境の中国側の都市の集安市で一台買ったことがあるが、日本まで持って来ようとしたがさすがにそれは叶わなかった。このタルタルならば各家庭に一台くらいはありそうだが、日本でよく見かけるリヤカーはゴムタイヤの車輪で、多くの荷物を運ぶことができるので、一台当たりの値段は高価である。北朝鮮からの脱北者に聞いたら、日本人の物価感覚で言うならば「高級乗用車とまではいかないが、結構高い車（乗用車）のようなもの」とのことだった。世帯主である夫の収入に頼ることができない家庭の主婦は、高利貸しなどから借金してリヤカーを購入するか、またはタクシー会社の運転手のように、リヤカーを借りてきて1日いくらと言う賃貸料を払って営業をする人が多い。他人の荷物を運ぶ場所と言えば市場と駅周辺である。平壤駅など北朝鮮の大きな鉄道駅の広場には、このゴムタイヤの車輪のリヤカーが列をなして並んでおり、客の荷物を家まで運ぶ北朝鮮版の「宅急便屋」のような役割をはたしている。

北朝鮮でモノを運ぶ運搬道具として、このほかに貴重な存在となっているのが自転車である。自転車は大量の荷物を運ぶことはできないが、早く、簡単に運べる利点がある。北朝鮮ではかつては自転車は個人の私有財産目録では「第一号」に数えられるほどに、高価なものであった⁵⁾。しかし、北朝鮮の自転車にはライトが付いておらず、しかも「人が乗るだけのもの」でしかなかった。ところが日本製の自転車には「ライト」が付いており、暗くなった夜でも運ぶことができるので、北朝鮮では重宝がられている。つまり日本製の自転車は「軽量で、頑丈で、しかも荷台が付いており、さらにはライとまで付いている」ので、輸送、運搬手段として北朝鮮の自転車よりもはるかに有用であり、好評であった。日本製の自転車を所有していることは、北朝鮮の人民にとっては一種の「ステータス」でもあった。日本製の自転車があれば、「遠くまで、夜でも走行できる」ということで、農村などに食糧購入に行くことが容易になった。このために北朝鮮で新たに生まれた商売が、道端のあちこちに出現した「パンク修理屋」であった。簡単な道具類だけで営業ができるので繁盛したが、その中でもゴム接着剤などは日本製がいいというので、これを聞いた北朝鮮に帰国した朝鮮人が日本からこの接着剤を多く輸入したという。この「パンク修理屋」とともに、平壤市内には自転車通勤する人たちなどのための「駐輪場」が市内の各所にでき、さらには自転車泥棒が横行するために、自転車に取り付ける鍵が売れるようになった。

北朝鮮が日本から自転車を大量に購入することは、北朝鮮の利益にも合致していた。「エネルギー不足」の北朝鮮では、鉄道輸送が電力や石炭不足などで十分な輸送ができず、石油が一滴も出ないのでほとんどを中国からの輸入に頼っており、バスや貨物自動車での「人と物」の運送は限られていた。遠距離の鉄道運行では「運

休」や「遅延（数時間の遅延は通常で、数日間にわたることもある）」はもとより、鉄道施設の老朽化などにより走行時間も遅く、新義州から平壤までの鉄道の走行時間は戦前のほうが、今の走行時間よりも早かったと言われている。このような輸送、運送事情にあって「小回りの利く」自転車は人民には必需品であり、列車やバス、貨物自動車の代用の役割を十分に果たしている⁶⁾。

つぎにトウモロコシ米についてである。筆者の研究室には北朝鮮のトウモロコシがある。そのトウモロコシには、一粒のままのものや、半分の大きさに砕かれたもの、4分の1くらいのもので、粒状になったものなど大きさもさまざまである。北朝鮮ではトウモロコシは副食物であるが、地域によっては主食でもある。前日から蒸かしておいたトウモロコシに野菜や雑草、時には木の皮などを入れて煮たトウモロコシ米の味は、“お腹の空いた住民には、腹を満たすだけの食事”と言うが、これに“人造肉”⁷⁾や豆腐などのおかずが出れば最高の食事になるとのことである。

第3章 「食糧難はどの程度か」（6月号 44～45ページ）

本格的な農繁期を迎えた北朝鮮に前例を見ない深刻な「干ばつ」が襲った。「朝鮮中央通信」は5月2日に“2月中旬から4月30日まで北朝鮮全域の平均降水量は23・5ミリで平年の35%程度に過ぎない”と明らかにした。このような降水量は1982年以後、32年ぶりの最低値である。労働党機関紙の「労働新聞」は“西海（黄海）地区で数十年ぶりに初めて「ワンカムル（きわめて深刻な干ばつ）」は、農作業に極めて不利な影響を与えている”と強調した。また“今年の穀物生産目標を遂行するかまたはできないかと言うことは、干ばつ被害を防ぐか

防げないかと言うことに大きくかかっている”と明らかにした。干ばつの被害を免れることができない場合、今年の秋は深刻な食糧難に直面する可能性が高まった。北朝鮮の食糧難は社会主義的な集団営農生産方式による農業生産の沈滞、主体農法の画一的な適用、農業基盤施設と営農資材の不足など、複合的な要因によって1980年代の中盤から進行し始めたとみることができる。すなわち、北朝鮮の食糧難のもっとも大きな原因は、政権の誤った政策の結果であるということが出来る。本格的な食糧難は1990年代初めから始まったが、これは工業の沈滞期と関連している。その次の原因は協同農場方式の集団経営の結果として、金日成が主体農法という農作業の原則のためである。

1980年代でも北朝鮮の食糧生産量は平均して415万tに過ぎず、定量配給の基準ですでに平均して200万tの不足現象を表していた。これにより北朝鮮は1987年からすでに一人当たりの配給量を平均700gから22%減量して配給していた。ただし、この当時はソ連をはじめとする社会主義国家からの支援、一部は自らの輸入能力維持などにより、飢饉問題が提示されなだけであった。しかし、1990年代に入り、ソ連をはじめとする社会主義国家からの支援及び友好貿易の減少、経済難による農業原資財生産の急落、連続して起きた自然災害などにより食糧生産量も400万t以下に急落し、深刻な飢饉に直面するようになった。飢饉が最も深刻に進行したと伝えられる1995～1997年の間に、食糧生産は平均365万tに過ぎず、減量配給基準で食糧不足量が平均164万tに達するほどであった。2000年代に入ってから、良好な気候条件、韓国の持続的な肥料支援と国際社会の農業支援、それに北朝鮮当局の食糧増産政策などに支えられ、毎年400万t以上の生産水準を再び回復しているが、2000～2008年の間で食糧不足量は相変わらず毎年123万tを示してい

る。このように食糧難をもたらした要因中の一つである、金日成の主体農法と関連した逸話がある。黄海北道沙里院の米穀協同農場は稲作を基本とする穀倉地帯である。1980年代の中盤、日本の民間代表団は果てしなく繰り返られる穀倉地帯を参観し、北朝鮮の農業省に合作農業を提案した。日本の先進農法を導入すれば、1町歩当たり10tの稲の生産が可能だと思われるが、当時1町歩（1町歩は3000坪）5tの収穫を指示した北朝鮮農業省としては歓迎すべきものであった。しかし、このような合作はならなかった。資本主義国家である日本の農作業の方法では1町歩当たり10tの稲を収穫すると、この世で最も優れたと宣伝した金日成が打ち出した社会主義主体農法が間違っていることが証明されるからであった。このように先進農法を遠ざけた北朝鮮では現在、ホミ（小さな手鋤）で草むしりをし、鎌で稲刈りをしている。工業が没落し、石油が不足しており、春になると人糞を使用し、部落や道端は人糞の臭いで溢れ、農業機械の代わりに牛を使って田を起こしたり荷物を運んだりする。中世期と変わらないこのような現実のもとでは、食糧難は当然の結果であるとみなすことができる。

農民は一人当たり一日800gの穀物を基準とし1年分を分配、すなわち秋季の脱穀時に配給量の量を計算し支給を受けるが、1990年代中盤から今までその分配量の3分の1にもならない量だけを支給されてきた。分配された食糧だけではお粥を三食をまかなったとしても、ポリコゲ（麦の峠。翌年5月ころまで）を持ちこたえることはできない。これに個人所有の畑に命を懸けて農作業を行う。住居地域付近の山をどこかしこも個人の畑としてすべてを変えた。このような畑は傾斜がきつく肥料を使用しなくても、農場の畑よりも穀物がよく生育していることを見ることができた。このために熱心に個人の畑として農作業を続けてきた。このような個

人の畑が不法であるといっても、北朝鮮の現実ではこれは住民たちの生計と関連するために、禁ずることができなかった。

北朝鮮がこのような食糧不足にもかかわらず2000年代以後、1990年中盤のような餓死者が出なかったのは、韓国と国際社会の年平均100万t以上の食糧支援、個人耕作地の増加、食糧の市場取引のためとすることができる。特に中朝国境を通じ相当量が取引される食糧の密貿易と、全国的な規模で発達した農民市場は2008年以後、国際社会及び韓国の支援がほとんど中断した状態でも大規模な飢饉が発生しない重要な要因となっている。しかし、北朝鮮自体の食糧生産だけでは飢饉を防ぐことができないほどに、食糧問題は相変わらず深刻である。配給と分配は政府と住民を連結させる重要な輪であるが、それが作動せず住民たちはすべて非公式的な経済活動によって生計を維持している。

北朝鮮当局は1990年代以後慢性的に進行している食糧問題を解決するために、それなりにさまざまな新たな農業政策を推進した。食糧問題を克服するために北朝鮮の農業政策は、相変わらず集団的営農方式と計画的な生産方式を維持するなかで、農業技術的な側面ないし生産の効率性の向上に執着した政策により、食糧難を根源的に解決するには力不足である。中国の場合、個別農家に土地の利用権とともに、生産及び経営権の委譲、農業生産物の自律的販売権まで賦与し、つまりは人民公社まで解体することにより、1980年代中盤に食糧問題を完全に解決したことを認識する必要がある。

解説

北朝鮮は建国以来、「米は社会主義」として人民の家庭の米櫃に米が満ちてこそ社会主義は実現できるとしてきた。さらに北朝鮮の建国の父と言われてきた金日成は、人民を掌握するた

めに1962年1月1日の「新年の辞」以来、「わが朝鮮人民の理想とする生活像」は「白いご飯を食べて、肉入りのスープを飲み、絹の着物を着て、瓦葺の屋根の家に住むことである」と強調し、人民にその日が来るまで貧困と空腹に耐えるように訴えた。金日成は30年後の92年1月1日の「新年の辞」でも同じようなことを強調したが、死亡により実現することはできなかった。金日成の後継者となった金正日も金日成の遺訓を受け継いだ。金正日は2009年3月30日号の『労働新新聞』の論評「將軍様に従い朝鮮は進む」の中で、自らの誕生日である2月16日に幹部らに対し「首領様はいつもわが人民が白いコメを食べ、肉の汁を飲み、絹の服を着て、瓦葺の屋根に住むようにしなければならないとおっしゃったが、われわれはまだ首領様の遺訓を貫徹できずにいる」、「私は最短期間内に人民生活の問題を解決し、わが人民を他人が羨ましくならないような、良い暮らしができるように首領様の遺訓を必ず貫徹しなければならない」と述べたが、金正日もそれを実現することなく亡くなった。そして金正日の後を継いだ金正恩は、「私は人民がこれ以上ベルトを締めることがないようにしたい」と言ったが、北朝鮮の食糧事情は改善されていない。それどころか不足する食糧を確保するために、友好国のモンゴルにまで食糧支援を要請している有様である。

今のような金日成が指示（教示）した非科学的な「主体農法⁸⁾」を継続している以上、北朝鮮の農業生産には限界がある。翻訳文にもあるように海外の先進農業技術を導入すれば、生産量は間違いなく高まるのであるが、「金日成が教示した主体農法」の呪縛に縛られている以上、生産量の増加は望むべくもない。北朝鮮の農業生産の不振（特に稲作）の要因について言えば、「一に種子、二に土壌、三に生産方式」と言うことに尽きる。北朝鮮では種子改良の事業が遅

れており、しかも、稲やトウモロコシなどの穀類の種子の元種は日本時代からのもの多いという。度重なる品種改良によって生産量や品質を増加させるのが通常であるが、北朝鮮の農業生産ではこのような地道な分野での研究が遅れている。しかも、おなじ種子でも農業試験場での生産量と、協同農場などの生産現場での生産量とは大きな差があることが指摘されている⁹⁾。これは生産現場である農家が自ら品種改良による生産量の増加を図ることはできず、農業試験場など「上からの組織の一律的な指示」通りにならなければならない、その地域の気候や土質などに精通した農民たちの、生産量増大のための意見が反映されることはなく、農民の代表である組合長が上部組織に自分たちの農地に適した作物の栽培を進言しても受け入れられず、それどころか、上部の指導方式に違反したとして、一般の農民に左遷されることがある。

優秀な種子も大事であるが、その種子を栽培する土壌が重要である。「良質な土壌」を維持するためには、土壌に合った肥料を投入して「土づくり」をしなければならないが、北朝鮮では肥料生産や品質改良では落後している。自ら改良努力するよりも、韓国や中国などからの肥料支援に頼り、農業生産の増加を図っているのである。しかし、韓国からの肥料支援は李明博大統領時代から凍結されており、さらには中朝関係の悪化により中国からの肥料援助量は減少している。北朝鮮はかつて韓国から毎年30万トンの肥料支援があった時、土壌の三大要素である窒素・リン酸・カリ肥料のうち、窒素肥料を優先的に支援するように求めたが、これは窒素肥料が「弾薬・爆薬の原料」にもなるからであった。北朝鮮は食糧増産という人道的な支援物資を軍需品に変えていたのである。

北朝鮮の農業生産方式はソ連時代のコルホーズやソホーズと言う集団営農方式を今も受け継いでいる。これは農業生産が人間の労働力に依

存していた時には有効であったが、農業が機械化され、投入される肥料生産などが増加してくると、生産者である農民から生産品に対する「分配」の問題が生じてくる。無条件に国家へ一定量を上納する営農方法と、協同農場で「真面目に働いても、働かなくても分配の量はさほど変わらない」という、作業現場の状況では農民の作業意欲にも大きく影響してくる¹⁰⁾。このような営農方式の矛盾に気づいた中国は、人民公社の解体を図り、個人農を認め農民の生産意欲を高めた結果、食糧生産は激増したのである。北朝鮮でも個人営農により、農民の生産意欲を高める方法を論議されたこともあるが、個人農を認めることは「体制崩壊」に結び付くというような考えにより、北朝鮮政府は個人農を認めていない。ただ、食糧不足により飢餓に瀕している地方の人民が、山中や河川敷などに政府の許可を得ず作物を栽培し、それを市場で売ってほかの食糧・食料を得たり、人民同士で自ら生産した生産物の物々交換を行って、糊口を凌いでいるのが実情である。

結論

北朝鮮における「食糧不足」が、人民の食生活に与える影響を脱北者の証言から分析した。北朝鮮における農業生産方式が非科学的な生産方式である「主体農法」を継続しており、それが農業生産の減少に大きな影響を与えているにもかかわらず、それを放棄できない状況にある。この結果、北朝鮮は不足する食糧を海外からの食糧支援や商業ベースによる食糧輸入によって賄ってきた。しかも、食糧配給は都市と地方では大きな差があり、地方では穀類としての米が不足しており、米の代わりにトウモロコシが主食となっている。そのトウモロコシ米の配給も十分ではなく、「食べて生きていく」と言う当たり前の生活を維持するのが困難な人民も存在

する。北朝鮮が食糧不足を解消するには第3章でも述べているように、「生産方式」の変換である。これにより農業の生産量が増加することは北朝鮮政府も認識しているが、金王朝の体制維持のためには個人農による生産方式を認めることができないというジレンマに陥っている。しかし、今までのような友好国からの食糧支援や輸入などに頼って、人民の「食べる問題」の解決を図っていくことにも限界が生じることは明白である。北朝鮮が人民の「食べる問題」を解決するためには、北朝鮮独自の自力による食糧増産を図ることが緊要であるが、韓国との農業生産の増加を図る共同事業の推進屋、日本との関係改善（国交正常化）により、日本からの先進農業技術の導入（日本は植民地時代に朝鮮半島での農業経営の実績がある）などにより¹¹⁾、食糧増産を図り人民の「食べる問題」を解決できるのではないか。日本では「衣食足りて礼節を知る」であるが、北朝鮮では「衣食住」である。人民は「白米はともかく、せめてトウモロコシ米だけでも一日三食を食べるようにしてくれ」と言うのが実情である。それにしても北朝鮮は1948年の建国以来未だに「食べる問題」を解決できないでいるのである。かと言って今の北朝鮮の政治体制下では、「飢えた人民が反国家運動を起す」ことは不可能で¹²⁾、せいぜいできることは中国への脱北であるが、最近の中朝国境の警戒は厳しく、「この頃は脱北者は少なくなった。取り締まりが厳しくなったので脱北が難しくなったことと、脱北がビジネスと成り立たなくなった」と国境沿いにいる筆者の定点観測者からの報告もある¹³⁾。北朝鮮の「食べる問題」の根本的な解決は、すべては金正恩体制の人民統治に対する「思いやり」の遺憾にかかっているといても過言ではないだろう。

翻訳は宮塚寿美子が、解説は宮塚利雄が担当したが、解説と結論は二人の合議で宮塚利雄が

まとめたことを明らかにしておく。

注

- 1) 平和問題研究所は1983年3月に、統一問題を研究する学者や言論人、法曹会関係者などが中心となって作られた民間の研究所以である。
- 2) ハナ園は北朝鮮から韓国に脱北してきた人たちが、韓国での生活に順応できるように訓練する施設で、3ヶ月くらいの訓練を受け、定住資金をもらって韓国社会で生活するようになる。
- 3) 北朝鮮の地方、特に山間部などでは冷蔵・冷凍施設が少ないばかりでなく、インフラが整備されていないために、新鮮な魚類が運送されていくことは少ない。それでも漁港近くの山間部などへは、漁獲されたばかりの魚類が行商人などによって運ばれる。
- 4) 北朝鮮は外貨を獲得するために、40数カ国に10万人近くの労働者を派遣している。金正恩朝鮮労働党第一書記は「一人や二人の脱北者が出てかまわないから、もっと労働者を海外に派遣しろ」と言っている。派遣された労働者の給与をほとんどピンハネして搾取している。
- 5) 北朝鮮では住宅が国有であり、食糧や衣類なども国家からの配給であったために、個人が所有する財産は限られていたが、その中で自転車はもっとも高級な財産であった。
- 6) 日本製の中古の自転車は「軽量でありながら、頑丈であり」、人も荷物も運ぶことができ、何よりも「ライトがついており」、夜間でも移動できることが最大の特徴であった。
- 7) 「人造肉」は大豆から油を搾りだして、その残りの滓を固めて厚さ3ミリ、幅5センチくらいの大きさに作ったもので、日本の「湯葉」のようなものである。食感が豚肉などと同じだということで人民には人気がある。しかし、人造肉は1kgが2,500~3,500朝鮮ウォンすると
 言われ（地域によって値段の差がある）、北朝鮮の一般的な労働者の一カ月分の給与に相当する値段である。人造肉は「お湯や水に浸すだけで柔らかくなり、これに野菜や山菜などを和え物として一緒に食べるとそれなりに美味しい食べ物になる」と言われている。中国の吉林省の延吉の市場でも人造肉らしきものが売られているが、北朝鮮の人造肉とは異なる。北朝鮮では各地の市場で売られているが、高値のために誰もが購入して食することは難しい。
- 8) 農業の経験も知識も乏しい金日成が「主体農法」と名づけて、「適地適作」「密植栽培」などを農民に強要したが、現地の実情に合わず、北朝鮮の農業生産におけるマイナス要因となっている。
- 9) 日本に来た北朝鮮農業研修団の団長が、「日本の農業の視察して驚いたのは、農業試験場の生産量と農家の生産量にほとんど差がないことだった」と驚いたことがある。北朝鮮の農業試験場と協同農場で使用される肥料などに大きな差異があることが原因という。
- 10) 北朝鮮の協同農場では労働時間や労働の質（重労働か軽労働か）によって、その人の1日の労働量が算定されるが、この算定が厳密なものでないことが多いために、協同農場での作業よりも、自宅ある「自留地」などでの農作業に精を出すことが多い。
- 11) 北朝鮮から日本には2006年までは毎年のように、「農業研修団」が来ていた。日本各地で先進農業技術を学び、農業に関する資料を収集し、時には種子類を購入していた。しかし、2006年に北朝鮮が核実験を行ったことにより、日本独自の経済制裁の一環として北朝鮮との「人と物の往来」が制限され、農業研修団などの団体が日本に来ることはなくなった。北朝鮮が日本から種子を持ち出しをすることを政府は制限しているが、民間団体からの寄贈や

種子販売店から購入して北朝鮮に持ち出すことはあった。

- 12) 世界でも数少ない独裁国家である北朝鮮は、言論や集会、移動などの自由が制限されており、人民が自由に発言することは制限されており、また発言した内容が政府を批判するような内容の時には、反政府活動の名のもとに逮捕・拘束され、重罪に処せられる。

このため北朝鮮の人民は「見ざる、聞かざる、言わざる」を生きていくための生活の知恵としている。日本でも「壁に耳あり、障子に目あり」と言われ言動が外に漏れることに注意を払うが、北朝鮮では不穏な言動が露出した者が、「夜はネズミの知らない間に、朝は鳥たちが知らない間に姿を消す」と言われるように、周囲の住民が知らない間に一家が連行されていくことが多い。「もの言えは唇寒し」の意識が人民に行きわたっており、隣人同士の監視体制が行き届いている。

- 13) 筆者は1992年から中朝国境の中国側に、北朝鮮の情報を入手するために鴨緑江や豆満江岸に、情報を提供してくれる人を定点観測者として置いている。彼らには情報ばかりでなく、北朝鮮に親族訪問などで行く朝鮮族から北朝鮮から持って来た北朝鮮の物資（グッズ）などの購入も依頼している。